国立国会図書館　　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

凌霜俚談 菊廼井雙紙巻之九

教訓亭主人

江戸戯作者 爲永春水著

○

かくて此然鷲陀ハ。お君が閨房に志のびいりこれ
まいいとく熟睡しより天のあたえところの理。
笑を含んで大きをひろげ。お君が上にまたがつ
て。矢庫よこれを撥いざく。お君ハ嗟と驚き
覚えて志ハ難なくんとよくつれれバ月代五六

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

分ばかりに伸び。星にひとしき眼ぬれ開き。
腰に刀を帯たれば。おれは世にいへ押込の盗
人なるらんと思ひつ　「アレこの人はどなする
のぞ。ヤレヨ〳〵ト叫ぶこそ。家内のものは夢に
驚き。すはや盗人いるとなりと立騒ぎ
その所へ彼熊鷹はお君を抱へ玉ぎるばか
りの白刃を輝くと晃めかして踊つて出れ
ふぞ人々も白刃の光りに氣を奪れ。敢て

壬ほくものもなし。熊鷹得たりと脊戸の
方より飛がごとくに駈去つそみちを行と
十四五丁。ふるき罡にいざれおろし。ヤレ〳〵
大きに骨を折たト。咳きながら四方を見直。
お君が側によりそひて　熊「コウ姉佐なんぞ
そんなに泣のはおれが怖いのか。コレ〳〵息を
あげな其へなんにも怖いことはねへぞよ。全てへ
おれが男のうへは。もを歴々の果だけれど新姉

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

たもみんな恋の墨。ノウ姉佐実に恋ハ癖ものゞぜ斯しておめんを荷ぎ出しとも元ハといへバ可愛いくらよ。コウ姉佐よく皆な物ハ相談様とも談合ことしもまゞ独身でぞゝぞ谷量のいく女が。あけたら嫁くアに業ハなと朝晩おもろく居るけれど。常にや頼りし稼ぶやなぐしでぞいのもんろ縁遠いうんそめらしくがおめんの因果まことうん深さがこゝろちも

因果ぞ因果ぞうしの寄合でこそしさま婦にある氣ハねんかア此どろハ不僥倖で強がねへから髪月代も湯へも這入らぬ天窓ハもしやくしや。立黒くでどのか稼ねへ漢子ぞと思ひるさるかア知らねへがとまでも能まバまんざらな拾と漢子といのでハねへコウ姉佐マアそんなに大変あげて泣てとか。サアく此呼へト引よりせれバおまハ弗をたらひのけ 「アレ否ぞよ此人ハぬしあれ吾

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

俯を連く来て。身を汚さして楽しまゝとは
あんまり憎い仕方じやるいう斯いふところへ
はまて来て。るんのうんのといふうちに。
こいつさら殺さふと思ふところであらうがなところ
さば殺せとのうらぐ。よし細の目に刺まれても。
ぐうして肌を汚されふト。合夜と伏をまて抱き
おとし 然「イヤ姉は そうやアまア。あんまりおめ人
氣づくひぜ。よしやぬしある物にもしろ。おまも

漢子ぐ斯いひうけて。吾ごうくさてよさまてる
物。よく氣を出して挨拶しる。何もそんるに
びくくと。怖がるとアどぜ人ゆせん。コレサ姉は よく
きてる。おめ人せ人羞恥するやア。見うくずつと立
のひて。たとえ此の采山の奥鯨なる淡上虎伏を
此辺も。いとやア志ね人。どんな苦しい三尺店に。
居ずがまくこよおめ人をば。且那のゆうにして遠て。
私も汲ぐ飯も焚き。裡の脊戸家の物国所

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

も。往くとびでのおくりとひけ人。るんでもうでも出来
あらぬ。ハイくと辻轎舁り。雄氷峠の凸凹を育
のるを牽せうに。そうもやう大て人大るがつて。ある
支じやうねへコレ姉ヒト。まことうとはくをおし
除く「チヤ悔しい女の腕。うよハき所へつけ
とんで。さあ〳〵と無理るす。ゆうバきくねど復が
たろ。どのでとるこのひみハ。るんといつてもあらぬ。
いつも殺しもくト。涙るがらに透あらバ逐んと

すまど鉄鷹ハ常を志川うと引きくるを眼を
怒らし威しつ縣しつ。いどむ所へ奇るり哉云十
有余の老公相が。何所よりうハ飄然と立あらハ
るくとうん人こうとしが。彼鉄鷹が襟首をさ
ようすもやく瞬間に遥の溪へ跳おとしたり。お
ハ思ハぞ事をこそ。とまハ何所の此方にて危急
を救ひなのらん。と泪るがらに身をあハせ彼老
人ハまことさらに。一言半句の回答もせず。お君を

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

女をとら抜け起し。緊と小袖に掻とみて。山坂雖
所の嬉ひなく。風に志てがふ雲のごとく。まさに大鵬
の翔るに等しく。何方にもなく飛ぬきしが。此にある
門に抜けおろして。とまぞ此身が志ばくくも是を
當べき家居なり。吾ハ是より帰るぞとまさに飄
然と云されバ。お君ハ頻つまに変うけて。ひづくの
人にまゝしまゝとぞおん名を使しなハれと。いへせ
更にコん向もせず。ナヤ樹がくまて行方を知らず。

この時ハナヤ明方にて東の方もしらむ。
お君ハあまりの不測さに。こゞ忙然として居さ
つましが。瞳をさゞめくよくつれバ。此所なん已が
放々の稲毛村にて此門ハ正しくおのが行居
なり。さてハ心の迷ひうをよく〳〵つれバ絶ひ返。
おハ美なくハあらざるかと。嬉しき組しきこれ
まぜて。要時踟躕居たりかなと。うるべしまた
露志らず。森三郎ハ道を急ぎ甲府にいたり

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

貝屋町なる福徳屋亀右衛門を尋ねゆき法
如此このよしを語れば。その小七は放々の中間人
帰るを長の娘ごんく。皆まことなるし。なる
ほど至極むじや。ともに帰るがよからうを暗
發見しましことは。本意なく甚三郎。そぐ
さぬそうて久しつ。次の日お君をあづけおき
たる。酒肆へいたれば何やらん。ひとりとなるぬ
發の客子遥に見るより胸にとえ。そうりは

急ぎ弦いりて客子をきけばお君をは然事となん
諱名せし陀六といへる悪児に奪ひとりまて稚
子のこ跡に残るをきくものから。喜三郎は狭然
をて。手のまひ足の湾にをしらず。果れてぞうり
を後居に坐し然然として居こうとしが何思ひ
けん立あがりて。うの稚子をうき抱き。あれくさして
立さうとね○そまハさておきく爰にまゝ腰越村の
村はづれ。店に二枚の障子を建りけ。酒といふ字は

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

葉一八に内より青そうどんどん。棚に積おく赤
椀や二荒猪も埋まるく。網代蓋せし石皿ハ鯔
の酢いるとう芝海老か傍にかけくる看板ハ。彼
京橋の坂本氏諸国に弘まる仙女香丁子の
紋をつけくるハ桑三が家傳の歯みがきと張を
うつくゐる丁子車紅もあれバ白いもあり。あれハ
あれ都の油町作者が店より取はぐるべし。
主とうんて六十ばかり。土間の真中に築立る。

三ッ竈の中の釜蒼変らあらぬ湯氣のたち
下に屈こて火を焚をり女房とうんて一人の老
女襷まへだれ開がしく。葱の白根を刻んで
居る是するなら別人なるべし。菊の井が祝細仙
夫婦かくる呼へ年の頃十八九なる美面よりき娘
表の方より弦とむにぞ主ハ驚きこれをうれるに
此に等あたりにうんぬ女 「さ おまへハ
げうさんな何のるべ人の内へト。いはまて女ハ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

ミたらんるのミ。己が口へ指をさし。奥の座敷へかけ
のぼる。畑作まだ驚きて跡よりゆけハ女房
も怪しゝ思ひて弦よるに女ハ母をたゞにあき。眼
を白く黒くして口より吐しハ盂蘭盆會に彼
魂柳に侍へける。いが栗に彷彿たり主ハ甚ふ人
片膝たて 畑「マアく」おまへハ何所の人ごとれハ
まことぎうしたもの。ハテ合点がいかぬトいへバ女ハ
涙ぬうち拂ひ 女「ヲヽ」あぐくゆむ今に容子を

やませうト。いふさへ漸く口中の痛ミに堪ざる
容子なり女房ハきてんの柳の箱中より取ざる
小さき袋ハ丁子車の遠ぶきなり 女房「ヤレく
おまへハ今の物を口へ含んでどざるこうゝ大かた
其所を突ゝて痛むであらう是ハアノ功能の
ある歯みがきしや指へつけて塗るさいぞふも外
みハ茶もるいトいハれて女児ハ却し裁き指の腹
みて口中の痛む所へ塗にかゝる所へ一個の

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

漢子其所ニ きこゝろ〳〵 弱いりて 男「ヤア おやぢ
何をするのぞ。折かく物しこアノ女児ともやく此所へ
引ぞり出せト。其所へごろかり 腰うちかくまゞ主ハ
そまこと半をさまろと 畑「そるんぞ此人ハ外かの悪い
大きな変して。十二物しこ女児こア 男「ハテサテお
ゆら まゞけるな。さろきちゝことこんてあいこ。るん
でもこゝへ這へこに。遠ひハね人。誰ぞとおもふ坂東に
名も隠れるき陀六さるぞぞ。ちよいと白眼ぐ

あいこうらうやア。百間先のさげ 計でも。こんそくるハ
ね人出眼力 然 奪るさまで 渾名をされて。立流な
男ぞコレ あやぢ。きるし〳〵 其所へ出しやアがれト。いハ
まこく主ハ年よりても。影育ちの氣張ハつよく 畑「そ
ゆうましハ 腔那ぞるア。知らねへものが出されるもの
か 然「いふ人出さゞア 仕方がある。面掃しせうかト
立あがるを。うまハ志ろうを引こゝ人 畑「るんがとんな
疲 帯でも。ほめ人達に ほどみにされて。この事

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

だいがるるものゝト。彼ハ陀六ハ大きに怒り拳を
うちゆくおんとする下ゝいくらとて細作ハ陀六が
胸さり引きて人。組づれどれつするに人来りるに
目明がそまてつんるより踊りのまゝ此後ハ見つゝ
あるかけく勿地陀六へ手ゆの縄高手に小手
をぞいましめる主ハ手ぶつき一ト息つき傍に屈く
みたりーが彼目明ハ陀六をつれ知縣所へ引立る
早竟陀六ハいかるものぞ彼五川の代夜にて

に哀慕し追放せられし犬山軍蔭なり浪人
の身のよろべるく所々方々を徘徊して恐るゝにして
なさゞるなるし。さて知縣所へ引もてゆかれいちく
鞠問せられしかバ悪るものの志ぞい白状し這回も
との往還すて。東西よき女児こゞひとり乃を気
ぎて走るを見こちまち悪心發ひくく是を捕へて
棄んと思ひ如此々々なりとゆせしかバその罪記
刑状のがれぞとて天網絶ふ身を責て首を刎

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

らまとるとなり。軍務お菓のくさ屑にまるまひ。
猫にいとみえし事により終にその男を玉川の
底の名屑となりしより忽地其地我逐ひ拂はれ。
今まとお菓が親の家にて縄目にかけられ死我
いとに互にそれとハ知らねども。因果をめぐる
くるゆのごとし。応報の理ハあきらけし。嗚呼
おそるべきことなるべきや。かくて此あるる酒肆の
道畑ハ女児にむかひ畑「サテくおまえハ僥倖なア。

悪児に勾引されて賣られる所であつたぞへやらく
アれバまだ幾い嘯噪アどのアノお菓に二ツも三ツ
も下であらうかとんな女児をつれるとびにあいつが
王を思ひ出せ。今どろハよい所の女児にすれ
かもつて来たらそれにまたアノ世郎ゆもいまに
行ふ事ハさつたり知れど悪いことでも仕出来して。
公家の所蓄労にでもうくらゆやよいがと。なんに
たぐの一日でも思ひ出さね日ハねんぞ。夫に付ても

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おまんハマア並大てんの人とハいんへぬ大かこ死れも
あるごらう。どふしてアノ悪児めに引ぎてまで
来さしつこのごト。まるく女児も泪ぐこ　女「モウ
僥倖なことくしもよいお方の内へ這へッて老ふ
い所を技かりまして。ありがとうございました。
ハアノ〳〵お蔭那中此とやまでおりて挿酒屋小
会湯の娘おせんとやまで着でどざいまたがいふこ
いふまね沢ありて。内をバ逐電いたしまして送奏

の尼寺へ乗るまでろ怖れ人に捕へられ口へハ何か
痛いもの押とされて夫も出ぬ引まて所をアノ
人が浮ぬに行くを僥倖と此所へあげて来り
まして大きにお世話になりまたるト皆て二人が
眉に皺　細「ナラ〳〵おまんハアノ中此で挿酒屋の
女児れじやと。ハテサテ見測と面ん合せて　細「夫
でハすこしころちにも仕合ちがどざりまたが。
マアどふいふ沢ぐおまんハ内を　女「サアそのこけハ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おけとなしつゝも 畑「そ出来こくいといひるさるゝ。
無理に使のまも及ばぬが。そんなるゝおまへハ株洒
屋の別荘とゆゝ玉川に三年ばかり此世活に
なり。その後隣成るい支があつく男を投ましこ
お菊といふ女を知つくどざるゝや 女「イヱ〳〵息ハ
知るまませんが。それハ吾侮の兄さんが深く別
深ざ恋が人ハ 畑「ヲ それ〳〵菊の井ハ。ことしあが
女児でどざりまほト。使のくおせんハびつくるまし

「ぜんこいその菓の井さんを恋が寝ゝうけ
出しこも。お復に吾侮が兄さんの 畑「お胤を宿
おく產おとし。おゝも雄の児じやそふる。そふして
こんれバ女児めハ。こと人死でも其子ハ孫おまへさる
こもまんざらな。除こ中でもるいこれ〳〵。シテその
兄法の小さきな。勘氣をうけてどざるといふを。
人の噂で使ましこが。元ハといへバ女児めに。お
金をこんと法ゝハれこ由来。知つこるでハるけ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

まだとも子ゆゑとおもへばお氣の毒をひこしおら
がおまへさゐの。危ふい所をおあまとけやうも神さ
さゐのお引あいせ。どふいふ沢ハ志らるゝが。内へ
お飯りなさるがいく。豎こしがおともして。お宿へ
送りで進ぜまし。祝具ぬへもおめにかゝつて。中七
さゐが此勸氣の。此浣をゆしてこんませうトいふ
まで今ハ果敢こと。蒼もなるゝぬお千がひね。三
まハ姓しいおところざし。志らがどふもこゝくしハ。

内へ飯る。ハるい。シテまた兄さんもよろく居
所も知れまして。近い内ハ宿へ入る。お僕にも
なりましたト。皆てうが訝しく。細「そんなら
兄の小七さゐハマアくよいといふものじやが。ぞかも
こちらぬおまへさゐ。何でもぜひく送つてとぞけ。此
両祝へおこしやさう。せん「ぞふぞこしハ氣付
せふ。どふで送りて下さるなら。アノ強念の松が
園へ。細「イヤくそふハなりませぬト。老の一圓に

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

おしゝも嫁ぞ。女房ハ二人がそバ人来て　女房「モシ
お嬢さゐ　どのやうな。お沢合ハあるまゝせぬが
外の人なら鬼も角も名のいくつれバお菊
めも子までなしと此家の姉によいことならバ格
別じやが。まだ廿にもならぬ此男で居にならぬと
おつしやるのハマよくくな事じやとハ案して居
ても此客子を志らねバそのハさせられませぬ
どんなことハ知らないが。ちらつとはまんで其沢

を　せん「それなどまでに此二人が言て下さるお志し
そんなら訳をやしませうが。いつも何やらたつか
志い。必ず人にそんな事。嘱嘲もして下さるな
女房「なんのまゝおまへさゐ。誰にたなしをいたし
ませう。サアく早くト甚立られ。語らんとして
法然と　せん「サアその訳とやまものハ一体兄の
小七さゐと吾儕とハ復がハり。それじやによつて
此吾儕に跡やるとしていと母さゐが七度といへ医

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

者さ及と心を合せて物うこい兄をとらく居
来るものにあるして勘当させ。行衆の志れね
を僥倖に思ふてどころこその所へ兄の在家が
知れまして。アノ事の半三湯が斗ひまして在
所へおきノ上いうちうは内へいれ勘当許すといふ
をきて。まこと七席と思切て毒害して兄を殺し
吾儕を立るといへことを聞こときの悲しさつら
さ。ホンニ吾儕の身にとつてハ勿体るゆゑどあり

がこい母の心といひるがら因心にけこ兄さ及を殺
志て吾儕がその家をどこにて続ぐおらまませう。
吾儕がなくハ母さ及も鬼より蛇よりおそろしい。
功ゝをなさる事理もなし。いつそ首でも縊つてと。
泣てだろうり居るまましこが夫ゆゑまでにあるさる
のも元はといへバ仇るいことしを羨しい可愛と。
思しめしての夏じやのに。モシ死んこらバ悔や
さぞ。おるげきるさるであらうかと夫を思へバ死ね

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

みもみなまだ。思ひ付くこハ滋会の尼寺へ住て
藤をおろし。女僧をもるつくこゝ男の羅の滅びる
たねともるらうゝと母さまへハとなぐと泪ながら
に書おきして出ましたゝゝにハどのかうることが
あれても円へハモウ。帰る氣ハるいことしがところ
ぞんぞ猜量して下されト洛るも泪のあるれ。
聞る二人もこの女児が心の内を汲うねてこそ
ハとだかり変曇り。霎時ことばもなくだかりを。

雅の雫ぞあはれなり。巻をひらくの児女さらに。
お千お君菊の井おが貞操節儀の條ゆに照を
こゝめその男を彼等にまさるまも慙へうゝずと
氣をたげなし。おとるしく志と父母の心を体
なへりし。そにおまへ由くりなき人の投げに稽色
なる。父が門前に捨ましく虫に入らんと思ひ
志が良人を尋るゆへとハいへど。三年このうち流
出して深き欲きをかけまくもうしとき父に逆

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

ことゝいとく酉ぶせるまどゝこゞるき後ハいりゝ
志ゝ浮世をこしらゆるひけん。朝る夕なの婢し
業しぐるゝ一ツみてさぞやさぞ。朽おまてくとそ左
すらめと思へバいとゞ遥ことさの。ゆるゝこゝるくも
思ひつゝ踏躊ゐどに志らくと明離まゝる東
雲の鳥とともに此家の主文ゝ進ハおきおつ。
惚惜二ツ三ツなして頻て雨戸をくるゝ明つ文
今朝ハいつもより。まゞ解程早うつゝ人衣程

長イ夜でハあるゝ時ハ秋の夜も。まゞ短いを
思ひしが。とる年をとく叶ぬものじや。夜中にも
いくしびり。眼の覚るゝにハ風つゝとてそろト獨去
すれ折りしに己が時をく久方の雲ゐるを辨て
ことゝる屠たるゝの因ぞ人落ゆけバ文ゝ進ハ
とれをこんて「漢の武帝が詞にも秋風発明て商
雲ゝ草木黄ゝ落て屬南へうへるゝあれハ。
ア実に絶妙じや鳥獣さへ時を知つて南へ朝

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

べき時ハゆき北へ飛ばべきときハ飯るよく人の
いのことじやが蘇武が胡国の例もあるに。アノ飛
めハ何所に居るか居ハ鵜をるらべて飛んでも。
そこにふく風の音信なく良人を索る心探ハ
ほがなるがらも貞烈と。[illegible]まだ不ある[illegible]
ものまだ十七や十八で。其所とも知らぬ旅の憂
さ悪児にでも復かされて。[illegible]しき[illegible]の[illegible]
にでも活まハせぬか何にしろ。マア安穏でハ居る

まい。活らまぬ所が連もない。若イ女児の独旅馬士
雲助おに淫戯まで大かた憂目をうんるだあらう
とまを思へバ一度なものだ。苦にハせまいと此もの
ても。夜眠がさめて此頃の肌寒きにもアく今どろハ
何所にどふして居おるやら男とちが門て見ぬ
高ひも出来まひしまづさしあらうて日この肌を
凌ぐ計劃もあるまい。稚るい時から側におき女
に七玄三従の所ある事をおしえたもどうぞ一

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

生安穏ぞ。よくも悪くも著せよかし。不孝不
貞のるいゆうゆと教訓あることをなかく。不賢しき
心によく覚へ。節を守りて良人の行方探んと
いふ志ハどこも氣健なゆつでハあるが。斯して久し
く音信なけまバ。アヽいふ難しい生れの女児あれが
ことをもさぞやさぞ夜呈案じて居あるごろうト
思ハぬ涙をためるゝぞ。文ゝ進ハ心づき「ヤレ〳〵る
庶なよまれで。ことへどんなに案じことて居て

もあれぬ女児がこ。マアく火でも焚つけうト立ゆく
勝手外面なるお君ハ父が独言きくに猶文氣も
消え。数行の涙とめあんぞ「モシ父さゆ此に明
てト。いふ変嫁ゝ文ゝ進「そのいふ変ハ女児じや
るいか「ハイく吾儕ぞござりまほト。嫁ゝうれ
志さ悦バしさ。尾落とあくる門の戸に父子ハ
たがいに良しあハせ。悪妻時詞もなりけるを見よう
如何なる奇談かある。なるを後帙を編録しゝ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

大圓象にいたるを解のこと。速に発行するに易し
適見看の児女童子例の教訓亭が癖と識
らば。四編の満尾をてゝし合せて。
宜評判を称ずるにあん。
作者改名して
爲永春水
奉願上人

菊の井草紙巻之九終

江戸 爲永春水著

江戸 歌川國安画

爲永門人 多満人補

爲永門人 古満人訂

爲永連頭 松亭金水証

連友 珍奇樓小松補

友人 文亭綾繼閲

洛陽橋 三林堂壽梓

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

208
12
682

御顔れくまつま美艶仙女香　坂本氏妙方なり

あらが深茶油　美玄香　いせうゆつうぜ　なづれぜ　坂本氏製

御たゑがき丁子くる後　通油町　爲永製法

淳美花　あらゆう　ふ　ごんぐい　あくん

うは　七勇婦傳第四編　爲永春水作

全六冊　一筆庵英泉画

繪入讀本類
中形人情本
新板品々

江戸書林　中村屋幸藏
西村屋與八　上梓

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用